

仏教には「<sup>いっさいしゅじょうしつうぶっしょう</sup>一切衆生悉有仏性」という言葉があります。これは、生きとし生けるものすべてに「仏性」、つまり仏になる資質があり、すべてのいのちは尊いということであらわしているのだと思います。しかしながら、21世紀の現代において“いのちの尊さ”“ありがたさ”というものが見えなくなっているように私は思います。

なぜなら、私たち人間は、つい“私のいのちはわたしのもの”と、自分の存在意義を、自己の執着心によって考えてしまうからです。しかし、それも無理はありません。私たちは現実<sup>に</sup>この世に生きているのですから。

しかも、この世では、人間として生きている限り、やがては自立し、生活をしていかなければなりません。生老病死を全うするだけでも一苦労なのに、それ以外に私たちは、自分の進路や人間関係、日々の生活、地位や名誉、お金の事などでも悩まなければならないのです。裏を返せば、私たちは、悩み苦しみながら生きるほかないのでしょうか。

こういった厳しい現実の中を生きているからこそ、自我の執着心は捨てられるはずもありませんし、それが厳しい現実の中で自分を支える力とならざるをえないのです。

しかし、すこしここで立ち止まって考えてみましょう。

わたしたちのいのちは、本当に“わたしのもの”でしょうか。

わたしが今日、今、この瞬間に生きていられるのは、“わたしだけの”ちからでしょうか。

それだけではないはずです。

“わたし”はわたしでありながら、無数のはたらきによって成り立っているのです。また、無数のいのちの連続や連鎖によって、“わたし”が存在しているのです。

父、母のいない“わたし”はいない。いままで自分が生きるために殺され、食べられてきた無数のいのちがなければ、“わたし”はいない。その食べられてきたものを育んだ生き物や自然のめぐみがなければ、“わたし”はいない。

人間は、悩み、<sup>えど</sup>苦しき多き現実世界、すなわち穢土に生きることを通して、“わたしのいのち”を成り立たせてくれているちからや、無数の犠牲に気づかされることで、すべての生きとし生けるものの尊さを見出すのでしょうか。

そのことに、「ありがとう」と心から思えたことが「南無阿弥陀仏」の内実であり、かけがえのない“わたし”を成り立たせて下さっているすべてが「<sup>ほとけ</sup>仏」なのだと私は思います。